

天下の双福と言われた男たち―福地桜痴（源一郎）と福澤諭吉』

大久保啓次郎

天下の双福」と言われた福地桜痴と福澤諭吉。二人は幕末～維新を生きた同時代の人。諭吉が5歳年上。福澤の死の際に両者の人物が比較され「福地は才能においては福澤よりも優る。しかし、意思の強固さでは福澤が数段上である」と評された。

二人はどんな人生を歩んだのか？なぜ、福澤は後世に名を残し、福地は後世に忘れられる人になったのか？

いかに頭が良くても意思が強くないと人生は失敗すると云う事を二人の人生が物語る二人に共通している

のは、学問に対する前向きな姿勢、しかし、意思の強さでは対照的であつた。福澤は一夫一婦制に生きたが、福地は女狂いで、吉原や新橋など遊郭に足繁く通い身を持ち崩した。二人共、学校経営、新聞社経営、に携わるが、福地はすぐに経営に失敗し、他のことに邁進する。福澤は資金難の時代も乗り越え慶應義塾を存続させる。意思の強さの違いがはっきり出ている

福地は事業に失敗した後に、歌舞伎座を立ち上げたり、文学での活動を行う。

桜痴の「人生の歯車」はどこで狂ったのか？

今日、福澤諭吉は、1万円札の顔にもなっている事もあり、福澤諭吉の名前を知らない人は殆どいないであろう。しかし、福地桜痴（源一郎）の名前を知っているか、知っていてもその人物について語れる人は少ないのではないのか？

早熟の才に恵まれ全盛時代には、大記者・新知識人として活躍した桜痴であり、その後の人生も決して世に埋もれていた訳ではない。

それでいて、生前から忘れられた人として、遇されたのは何故か？

福地も福澤も幕末の洋行をはじめ、何度か人生の軌跡を交叉させている。

どこで桜痴の「人生の歯車」が狂い二人は離れて行ったのか？

「世に立つとは何か？ 才能とは何か？ 意思の強固さとは何か？」を、二人の人生を通して教えられたような気がする。

福澤諭吉の死に際して、福地桜痴が読んだ弔辞「旧友福澤吉君を哭す」は名文である。

ここで福地は福澤の偉大さを称え自分の生き方を反省しているのが印象的である。